

【実践報告】

長野県青木村で「信大YOU遊世間」の学生が培った社会力

小岩井彰・土井 進

1. 青木村の「地域ブランド」

平成21年（2009）3月4日（水）～9日（月）、青木村文化会館を主会場として第9回「全国フレンドシップ活動」¹⁾ in信州が、9大学から70名の学生が参集して開催された。将来の大教育者への志を抱いた学生たちを前に、宮原毅村長は「皆さん！ようこそ青木村にお越しくださいました。青木村は村に国宝²⁾がある全国唯一の村です。そして、青木村は義民の里です。」と紹介された。

青木村は、長野新幹線上田駅から西へ約12kmに位置し、三方を青木三山と呼ばれる十観山（1,284m）、夫神岳（1,250m）、子檀嶺岳（1,223m）に囲まれた自然豊かな美しい村である。人口は4,800人弱で、平成の大合併が推進される中、上田市からも誘いの声がかかったが、宮原毅村長は毅然として合併の意思はなく自立の道を選択した。合併の賛否を問う住民アンケート調査の結果も、自立を選択する者が45.5%、上田市への合併を希望する者が25.5%となり、村長の方針を住民が後押しする形になった。

小村なりといえども自立して険しい道を歩んでいこうとする青木村の人々の心底には、一体如何なる思いが流れているのであろうか。それこそが「義民」への崇敬の念であり、「義民の里」を誇りに思う深い郷土愛であるといえよう。宮原村長は、「青木村の義民の歴史を繙くとき、千数百年の古の律令時代に都から青木村を縦貫して陸奥・出羽の国に至る、旅人や防人たちが往来したであろう古道

「東山道」³⁾の歴史を忘れてはなりません。…当時の都の情報がいち早く確実にこの地に齎されて、長い時間これによって育まれた文化と豊かな自然が、この山深い里に「青木人氣質」と言われる正義と反骨の心に富んだ精神を育み、その気骨は今の村民性にしっかり残っていると自負している。」⁴⁾と述べている。また、江戸時代の義民の研究者である横山十四男は、『上田藩農民騒動史』を著し、「青木村に見る義民の伝統」について、次のように述べている。

「江戸時代の百姓一揆を、全国的な統計数字で見ると、国別の第一位は信濃で、信濃の中で藩別第一位は上田藩である。その上田藩の領地の中で、特に百姓一揆が多く起こったところとして注目されるのが、現在の青木村に入っている村々なのである。

この地域からは、上田藩全体を巻き込んだ2回の大一揆を含む5回の百姓一揆が起こっている。そのためつい最近まで、「夕立と騒動は青木から」という言葉が、上田に近い里方の村人の中で語られてきたのであった。」⁵⁾

青木村の「地域ブランド」と言えるものは一体何かと思いを巡らすとき、我々は優れた農産物や観光資源はもとより、何よりも先ず豊かな自然と文化によって育まれてきた正義と反骨の心に富んだ「青木人氣質」こそが「地域ブランド」⁶⁾であると言っても過言ではあるまい。

2. 小岩井彰教育長による青木村の教育改革

青木村の宮原毅村長は平成5年（1993）5月に初当選して以来、現在5期目である。平成16年（2004）4月、宮原村長は長野県教育委員会に強く要望し、当時長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課の指導主事を務めていた青木村生まれの小岩井彰を、「割愛」という極めて異例の人事で青木村教育委員会教育長に抜擢した。小中学校の校長や教育委員、社会教育委員の誰よりも若輩者であった小岩井は、どのような論理で、どのような理念に基づいて村の教育行政を牽引していったらよいかについて熟考した。そして、恩師門脇厚司（筑波大学名誉教授）が提唱する「社会力」⁷⁾の育成という教育理論を旗印に掲げ、学校教育、家庭教育、そして社会教育の全領域における教育政策を構想した。それからの4年間、小岩井教育長は徹頭徹尾、青木村の教育改革に我武者羅に取り組んだ。彼が目指した村の教育改革の論理は次の通りであった。

「今こそ、村のすばらしい自然や文化を見直し、子どもたちが豊かな自然の中で多様な人々と直に接し、相互に触れあい活動する場を設定し、「人とつながる力『社会力』」を育てる必要があると考えてきました。これらの活動をとおして、子どもたちの人に対する関心や愛着、信頼感を育てたいと考えたのです。そして、これらが「社会力」を育成する源であり、様々な教育問題の本質的な解決にとどまらず、ふるさとを誇りに思い、国際感覚豊かな子どもを育てることにつながると考えました。

そのためには保育園、小学校、中学校の教育はもちろん、村全体で子どもを育てる環境作りが必要です。「一人の子どもを育てるためには村一つが必要だ」という諺がアフリカ

にはあるそうですが、まさにそのとおりだと思います。村全体が子どもを真ん中にして、本気で子どもたちを育てる仕組み作りと具体的な実践を進めることが必要だと考え、小さな村だからこそできる本質的な教育のあり方を求めて平成16年度（2004）から4年間取り組んできました。」⁸⁾

小岩井教育長は、村の教育目標を設定し全体構想を明確にするために、教育委員会できごとん話し合い、青木村の教育目標を「心豊かでたくましい子どもの育成—今こそ子どもに社会力を—」と決定した。「社会力」を育成する観点から、「心豊か」とは「人のことでも自分のことのように感じられる心情」であり、「たくましい」とは「人とのつながりを積極的に求める姿勢」にあるとし、この目標のもとに村の教育の全体構想⁹⁾を策定した。

3. 青木村と「信大YOU遊世間」の協働

平成16年（2004）11月のある日、小岩井教育長が信州大学教育学部の土井研究室を訪ねてくださった。青木村の「社会力」の育成事業と教師の「実践的指導力」¹⁰⁾の育成事業である「信大YOU遊世間」¹¹⁾について語り合うためであった。そして、両者が完全に意気投合するのに時間はかからなかった。平成17年（2005）2月、土井は学生を連れて青木村を初訪問した。その時の様子を末松辰規は次のように述べている。

「自分が一番何をやりたいかを考えていた時、土井先生から「青木村という村があって、教育に力を入れていて、学生の力を必要としている」という話を聞かされました。最初は見に行ってみようという軽い気持ちで2月16日に初めて青木村に行きました。すると、少しずつ考えが変わってきました。青木村は自分の出身の町（福井県越前町）と人口が同じくらいで似ているところがあり、村内にはい

ろんな団体があり、自分のやりたい活動ができる。次第に「こんなところで活動してみたい」という気持ちが強くなってきました。それと同時に、「初めて立ち上げる活動だから大変だろう」という不安もありました。しかし、青木村の小岩井教育長先生がとても真剣で熱心に接してくださり、「青木でどんどん失敗してみる」という言葉をかけてくださいました。その言葉に励まされ、うまくいかなくてもいいから自分なりに精一杯やってみようと思ひ、「青木村えがおクラブ」を立ち上げる決意をして発足に至りました。』¹²⁾

4. 青木村で「信大YOU遊世間」の学生が培った「社会力」の事例

青木村が青少年の「社会力」育成のための重点事業として位置づけているのが、「あおきっこ通学合宿」(6泊7日)である。学生たちは、この事業の企画運営に参画する機会を与えられただけでなく、保育園・小・中学校の教育支援ボランティアとして、また、児童センターでの活動補助などの場を与えられ、村の中を行き来するようになった。このような学生の姿は、子どもはもちろん村の大人までが活性化するという教育効果をもたらした。一方学生にとっても村で活動することが「社会力」を涵養する貴重な機会となった。村は学生がいつでも滞在できるように、学生専用の宿泊施設を用意するとともに、温泉利用も自由にできるように配慮した。

こうして青木村の人々と関わるようになった学生たちは、どのような「社会力」を培ったのであろうか。次に6名の省察文を事例として紹介する。

①「沢山苦しめられて、沢山お世話になった」(仲吉咲香) 青木村に通い始めて、学んだことは山ほどあると思う。まず人との出会いがあった。青木村の中で沢山の大人や子

もと出会い、青木村を通して他大学の学生や東京のプレーパークの人達とも出会った。出会っただけではない。これからもきっとずっと繋がる。通い始めた当初はすごく気後れしてしまい、「今日活動があるから来ないか」という声がかかると、憂鬱に感じていた。わざと用事を作って行かないこともあった。それでも何回も通ううちに、知っている大人や子どもが一人増え、二人増え、村の中でも自分一人で出歩ける場所が段々と広がっていった。人間関係を築く難しさやスキル、行政機関との折り合いのつけ方や、目上の人へのお酌の仕方まで、本当に色々なことを学んだ。沢山苦しめられて、沢山お世話になった。私にとって青木村は田舎になりつつある。沖縄に帰っても、また青木に里帰りする日が来るような気がする。¹³⁾

現在、沖縄県立知念高等学校の教師を務めている彼女は、次のような一文を寄せている。

②「私と青木村」(仲吉咲香) 青木村で学んだことを書こうと思いましたが、沢山あり過ぎて400字では書ききることができなかったので、皆様への感謝の気持ちをつづらせて下さい。私を鍛え、沢山の感動と「嫌われる勇氣」を与えてくれた青木村の子どもたち、青木村で共に汗を流した学生の仲間たち、学生を温かく迎え入れ、活動を支えて下さった青木村の方々、そして誰よりも大変な苦勞をしながら私たち学生の活動を見守り、導き、愛情を注いで下さった青木村の小岩井彰先生、授業で小岩井先生との出会いの場を与えて下さった土井進先生に、心より感謝申し上げます。「ありがとう」と何度言っても足りないほど感謝しています。現在は高校生物の教員として働いています。失敗することも多く大変ですが、私にとってこんなに楽しい仕事は他にありません。皆様への感謝の気持ちは、これから関わる子どもたちに返していきます。

本当に、ありがとうございました。¹⁴⁾

③「本気で泣いた合宿終了式」(竹本美奈子) 私が大学に入学するまで住んでいた地域では自分の家の両隣と向かいの人の顔はわかるが、名前は知らない。それより離れれば顔も知らない。ということは当たり前で、地域の活動が機能する余地など全くない場所でした。しかし、青木村はそうではありません。合宿企画の話し合いのために、青木村を訪れていくうちに、私たち自身の存在が地域に広まっていることに気づきました。そして、その浸透によって私たちはすぐに青木村で暖かく迎えていただくことができました。合宿企画のために泊まっている私たちを知って、地域の方が朝ごはんを差し入れしてくださったり、激励の言葉をかけて下さったり、そんな温かい人と人の関係に合宿前にして既に心を打たれました。学生スタッフとはこの合宿を機に知り合った人がほとんどでしたが、一人ひとりの合宿を思う気持ちの大きな土台があったため、ゼロからの合宿をここまで立ち上げることができたのだと感じています。合宿が終わった今では、企画した活動のこと、施設のこと、地域のことなど多くの反省・改善点が浮き彫りになってきました。しかし、当時の私たち一人ひとりが持っていた気持ち・体力・気力すべてを出し切り、通学合宿成功に全力を尽くしたことは間違いありません。全力を尽くしても反省することは山ほど出てくるのです。というより、尽くしたからこそ表面だけでは決して見えなかったことが出てきたのです。私たちの気持ちが合宿に向かえば向かうほど、より良い合宿を目指すために妥協は許さない、という飽くなき追究のはじまりだったのです。

私は、見たことのないドラマのCMだけでも感動して泣きます。しかし、超感動大作といわれている映画でも、映画館では泣く事が

できません。私はたくさんの方がいる場で、感情を素直に表すことができません。しかし、あおきっこ通学合宿は、そんな私が終了式の扉が開いた瞬間に本気で泣いた合宿でした。¹⁵⁾

④「私の一生の宝物」(荻原知子) 私は、大学2年生から3年間、あおきっこ通学合宿に関わらせていただいた。この3回の合宿での学びは表現できないほどあり、私自身にとっても大きな影響を与えてくれていると感じる。その中で挙げるとするならば、人と出会い、つながることのすばらしさや大切さを学んだことである。合宿を通して、一緒に頑張ってくれる仲間に出会い、理解し支えてくれる地域の方々と出会った。このように多様な人と出会い、つながったことで、さまざまな考え方や価値観に触れ、生きていく上で大切な人としての幅広い視点をもつことができるようになった。また、仲間集団という1つの枠の中で自分の役割やあり方を見つめ直すとともに1人では何もできないが多くの方が協力することで成し得るものがある喜びやすばらしさを感じることができた。さらに、私自身の小さいころからの夢である「教師」という職業へ後押しをしてくれたのもこの活動である。あおきっこ通学合宿の経験は私の人格形成に大きな影響を与え、今後生きていく上でとても大切な多くのことに気がつかせてくれた。学生時代にすばらしい経験をさせてもらったことを幸せに思う。そして、この経験は私の一生の宝物である。¹⁶⁾

⑤「子どもが真ん中」(駒村美代) 食事係として参加した時のことです。下ごしらえなどやるべき仕事が多すぎて、子どもたちと関わる機会がありませんでした。子どもたちと楽しく過ごしている班付スタッフや本部の学生の姿を見て羨ましく思うと同時に、自分に任された仕事の辛さに最終日が来るのを指折

り数えていました。しかし、そんな時に考え悩んでいたことが「子どもが真ん中」という言葉の意味です。調理室にこもっていても聞えてくる子どもたちの笑い声が、私を少しずつ答へと導いていきました。私は、子どもたちと楽しい思い出をつくるとか、子どもたちからたくさんのかんことを学ぶだとか、「自分を真ん中」に考えていた自分に気づいたのです。それから日にちと共に育つ子どもたちへの愛情が自然と仕事の辛さを消し去り、子どもたちの笑顔や成長を一番に考えられる私にしてくれました。そして最終日には将来教師になっても、スーパーマンのように目立つ存在ではなく、子どもたちの気づかぬ所で、愛情をエネルギーに子どもたちの笑顔や未来を強く守っていける教師になろうと決意することができました。¹⁷⁾

⑥「自分が乗る波は自分で起こす」(柴原恵) 青木村という村を知ってから、村の大人の方々から学んだことは多い。子どもへの態度、一般の常識、礼儀など、会話の中や活動を通して学ばせていただいた。その中でも刺激的であったのは、「自分が乗る波は自分で起こす」ということである。青木村の方々とお過ごしといても、そう感じさせられる。青木村で何か活動をしたいのだけれど、どのようなことをしたらよいかわからないということがよくある。このような場合は、何もしないうちに結局1か月も2か月も経ってしまうことが多い。波起こしを、怠っているからだろうと思う。…青木村で活動させていただくようになってから初めて自分たちで波を起こすことができたという、背筋が伸びるような気持ちを感じられることがとても嬉しい。¹⁸⁾

⑦「人として教師として最も支えになっている言葉」(市川香織) 学生時代の一番の思い出は、何と言っても「YOU遊世間」で過ごした日々である。仲間と徹夜で議論を交わ

したこと、愛おしくなり子どもをぎゅっと抱きしめたこと、他大学に友だちができたことなど、楽しかった日々が走馬灯のようによみがえる。どれも「私一人」では得られなかった思い出ばかりだ。そう考えると、「YOU遊世間」は、まさに「人と人との出会いの場」であったのだろう。なかでも、小岩井先生との出会いは、私の人生のターニングポイントである。小岩井先生のおかげで、今の私があるといっても過言ではない。なぜなら、人として教師として生きていく上で、最も大切なことを教えてくださったからである。それは、「おかげさまの気持ち」だ。

小岩井先生と出会う前の私を振り返ると、YOU遊世間の活動においても、その中心はどこか自分にあったと思う。なぜなら、活動が終ると、自身の達成感や充実感でいっぱいだったからだ。その傲慢な気持ちが、言動にあらわれていたのだろう。小岩井先生に「活動をやらせていただいている、大事な子どもたちに関わらせていただいているという〈おかげさまの気持ち〉を忘れるな!」と叱っていただく度に、私は自分の未熟さに気づかされるのであった。小岩井先生と出会ってからは、特に、保護者・子ども・地域の方との接し方が変わったと思う。簡単に表現すると、「素直」になったのだろう。そんな風に変わったのは、小岩井先生のおかげだ。素直の根底には、「おかげさまの気持ち」がある、ということを私は確信している。¹⁹⁾

5. 「教育」を核とした青木村の発展

「信大YOU遊世間」の中の一つのプラザとして立ち上がった「青木村えがおクラブ」は、7年の年輪を刻み一年一年大きく育てていただいている。学生は、一人ひとりが自己の壁を打ち破りながら確実に「社会力」を培い、「人間力」を陶冶している。このことに深い

感謝を捧げ、これからも青木村の「社会力」育成事業と、「信大YOU遊世間」の「実践的指導力」育成事業が謙虚に協働するという原点を忘れずに、「信州教育」の精髓を探究していきたい。

小岩井は、青木村教育長の職を去るにあたって、次のように述べている。

「私たち青木村は、この地域の特質に根ざし、青木村の教育の原点回帰の方向を目指してきました。本来ある青木村の良さこそ見直すべきものであり、教育の不易につながるべきものであると考えてきたわけです。それが、村の自然と人とのつながりです。自然の中で多くの人と直に関わることで、子どもたちはもちろん、大人たちも変わり始めています。豊かな人との関係の中に子どもたちの意欲が育ち、さまざまな教育問題の解決の糸口があると感じてきました。村全体が子どもに対して温かな関係を築くとき、地域が活性化する確かな手ごたえも感じてきました。人生の最初は誰もが子どもの時間を過ごします。豊かなこの村で子ども時代をともに創造したいと願って4年間活動してきました。どの時代も子どもは変わりません。それを取り巻く大人社会が常に子どもに影響を与えているのです。子どもを真ん中にした本物の育ちを地域からきちんと発信し、成果を上げるべき時が来たと感じています。大きな行政単位ではなく、青木村の様な顔が見える小さな行政単位こそ教育の本質を発信できる最後の砦になることを確信しています。…私は、義民の里青木村の進取の気質にあふれた村民性と村を愛してやまない人々こそが村の財産であり、村全体を動かす原動力であることを強く感じてきました。今後、青木村が教育を核にさらに発展され、村として自立の道を歩み続けることを祈っています。」^{20), 21)}

【注】

- 1) 「全国フレンドシップ活動」の第1回目は、2001年に鳴門教育大学がホスト校となり5大学が参加して「地引き綱」を実践した。これに先立って、1999年と2000年に信州大学教育学部で「フレンドシップ事業全国学生シンポジウム」が開催された。この折に全国の学生が主体的に連携して「全国フレンドシップ活動」を実施することが決まった。
- 2) 国宝大法寺三重塔は、「見返りの塔」という名で親しまれている。墨書によって正慶2年(1333)に造営中であつたことがわかる。文部技官工学博士 伊藤延男はこの塔の美しさの秘密を次のように説明している。「この塔をよくみると、初重が特に大きいことに気づく。これがこの塔の最も大きな特色である。これは、二重、三重で組物を三手先といういちばん正規な組み方としているのに対し、初重だけは、少し簡単な二手先にしたので、その分だけ平面が大きくなっているからである。このようなやり方は、この塔のほかは奈良の興福寺三重塔があるだけで、きわめて珍しいことである。塔は姿が平凡になりがちであるが、こうすると形に変化が付き、おちついた感じが生じてくる。まことにうまいやり方といわなければならない。」(青木村・青木村観光協会「国宝大法寺三重塔」)
- 3) 東山道の道標となつてきた「ねずみさし」(別名「ねずみんばら」とか「ねずの木」とも呼ばれる)の大木が青木中学校の下にあつた。その青々と高くそびえる様子が青木村の名前の由来となつている。現在その大木の根は、青木村文化会館、青木小学校、青木中学校の玄関に展示されている。
- 4) 宮原毅(1993)「第10回全国義民サミット開催に寄せて」『青木村に見る義民の伝統』p.1
- 5) 横山十四男(1993)『青木村に見る義民の伝統』p.2
- 6) 土井進(2011)「『信大YOU遊世間』の「地域ブランド」としての特質」『地域ブランド研究』第6号 pp.57-65
- 7) 「社会力」(Social Competence)は門脇厚司による造語で、「社会性」が社会に適応するという側面が強いものに対して、「人が人となつて社会をつくる力」という側面を重視している。門脇厚司『子どもの社会力』(1999)岩波新書、門脇厚司『社会力を育てる』(2010)岩波新書を参照
- 8) 小岩井彰「村中みんで子育てをー小県郡青木村の事例一」『信州自治』Vol.61, No.6 pp.26-27
- 9) 青木村の教育の全体構想として次のことが策定された。
 - ①保育園、小学校、中学校の保小中一貫教育の中に「社会力の育成」という軸を設け、保育園長、小・中学校長と明確な目標を設定した上で予算措置をした。学校の予算は先生方一人ひとりから計上できる仕組みをとり、園長、校長、そして職員がやる気と責任を持って子どもたちに向かってもらう土台作りをした。その成果と課題については学期ごとに話し合い、新たな方向を合意のもとに見いだす努力をし

てきた。

②「社会力」育成のための重点として、社会教育の事業作りも積極的に行った。社会教育委員会を有効に機能させるために、具体的な事業作りについて諮問し、その答申に合わせて様々事業を企画した。「あおきっこ通学合宿」(6泊7日)、「村内ホームステイ」(2泊3日)「児童センターでの外遊び」「保福寺峠松本フォーク」(1泊2日)などの事業はすべて社会教育委員会からの答申を受けて事業化したものである。また、事業評価についても答申事項に盛り込み、社会教育委員会が積極的に事業に参加し評価する仕組みを作った。諮問から答申までの期間は最長で6ヶ月。諮問→答申→事業実施→評価の過程で社会教育委員会が教育委員会と共に実質的に機能することを目指した。

③村の事業に村全体の人が関わられるようにするため、「青木村子どもはつらつネットワーク」を構築した。「社会力」育成のための論理と実践が村民全体に理解され、積極的に村民が参加する仕組み作りを力を入れた。村の情報発信は広報とは別に「子どもはつらつネットワーク通信」として村全戸に月1回配布し、村中が村の教育で何が起きているのか知ることができるようにした。

- 10) 「実践的指導力」という言葉は、昭和62年(1987)12月の教育職員養成審議会(教養審)答申「教員の資質能力の向上方策について」において初めて公的に提言され、今日に至るまで教員養成の中心概念として用いられている。
- 11) 「信大YOU遊世間」は、平成6年(1994)に始まった「信大YOU遊サタデー」を前身とし、その後平成13年(2001)に「信大YOU遊広場(プラザ)」として脱皮し、さらに平成15年(2003)に「信大YOU遊世間(ワールド)」として生まれ変わって今日に至っている。一貫して教育学部学生の主体的な意思と判

断に基づいて組織され、青木村、麻績村、長野市大岡、長野市茂菅、長野市湯谷小、須坂市で地域連携活動を展開している。

- 12) 末松辰規「具体・ご縁・謙虚・感謝の気持ち」土井進編(2006)『「信大YOU遊世間」の教師教育学研究』第12集、p.79
- 13) 仲吉咲香「沢山苦しめられて、沢山お世話になった」同上 p.83
- 14) 仲吉咲香「私と青木村」『教員養成フレンドシップ事業「信大YOU遊」18年の教師教育学研究』(平成24年2月)
- 15) 竹本美奈子「本気で泣いた合宿終了式」土井進編(2006)『「信大YOU遊世間」の教師教育学研究』第12集、p.83
- 16) 荻原知子「私の一生の宝物」『教員養成フレンドシップ事業「信大YOU遊」18年の教師教育学研究』(平成24年2月)
- 17) 駒村美代「子どもが真ん中」同上
- 18) 柴原恵「自分が乗る波は自分で起こす」土井進編(2006)『「信大YOU遊世間」の教師教育学研究』第12集、p.82
- 19) 市川香織「人として教師として最も支えになっている言葉」『教員養成フレンドシップ事業「信大YOU遊」18年の教師教育学研究』(平成24年2月)
- 20) 小岩井彰「村中みんなで子育てをー小県郡青木村の事例ー」『信州自治』Vol.61、No.6 pp.34-35
- 21) 青木村の社会調査の報告書としては、次のものがある。
村山研一・中嶋開多・辻竜平・祐成保志編(2009)『自立とひとつづくりの村』全144頁 信州大学人文学部社会・情報学講座
村山研一・辻竜平・祐成保志編(2010)『青木村の地域づくりと住民意識(自立とひとつづくりの村2)』全195頁 同上

(受稿日 2011.11.10 掲載決定日 2011.12.19)

(こいらい・あきら／長野県教育委員会東信教育事務所)

(どい・すすむ／信州大学教育学部)